

鵜川中学校区

## 黒姫山

第三紀層より噴出した輝石安山岩より成立した山という。

海拔八百九十八メートル山上に鶴川神社がある。美都波能売神および黒姫大神をまつっている。由来は景行天皇の御宇、武内宿弥が諸国を巡視された時、当国に参られ瑞雲のたなびいている黒姫を見て、そこに尊い神が鎮座していられることであろうと遙かにたずね登られたところが神の御託があつて、舟の大倉山というところに瑞殿を建立され、大倉氏の祖先が官司となつて奉崇してきたことである。

天武天皇の白鳳六年、神託によつて、十町子丑の方へ社を引き更に、後小松天皇の応永二年約三町東方へ遷座されたとのことである。今の元屋敷が即ちそれである。

鶴川神社という社号は美都波能売神が北海の波を渡つて来られ磐の御船に当山へ漂いつかれた時、多くの鶴が翼を並べて先導した。そして帆柱山と黒姫山との接合点であるところの池にその鶴が住むようになったという。この池が渋池であり池の水が流れ落ちて川となったのが鶴川である。

黒姫大神は西頸城郡黒姫山鎮座の奴奈川媛命でまたの名を「くろひめ」といい、越後の国を経営した大國主命の妃であった。命は遠く、この国に来て、機織を土民に授けられたという。

## 黒姫山の船道と帆柱石

みつはの女神は、昔、いわの御船で、この山に漂いつかれ、岩屋に突きあたり、船が岩屋の中に入り込んだという。

その時、船が通られたあとがある。清水谷地内の傾斜面の草の色が黒味をおびて一線をなしているのは、その船道だといわれている。山中、高さ六七間の岩が四個あるが、それを帆柱石とよんでいる。その時の船の帆柱が石になったものという。所々に鉄の輪をかけたような所がある。

## 黒姫山の岩屋

「婆の岩屋」とも「船岩屋」とも「姫が倉」ともいう。

清水谷に面した断崖にあり。入口高さ三メートル、中に入るに従つて次第に低く、深さ十メートル位である。

これは磐の船が、つきあたって出来た穴だという。

この岩屋の奥で、この山の神は、機を織つていられ、この女神の織られる機の音を聞いたものは、機織が上手になるといわれている。※一説には、岩窟の中で山姥が住んでいて機を織っていたという事である。



## 黒媛大女神

## 黒姫山の七ふしぎ

仁徳帝の皇太子が越後の国頸城郡のぬながわの姫（またの名を黒姫）をおきさきに迎えようという申し出であり、ぬながわ姫が上京された。そして結婚式の前夜、偽りの皇太子に花の蕾を破られてしまった。

それとさどったぬながわ姫は皇太子に対して申しわけがないと思ひ、黒姫山へたてこもられた。

ぬながわ姫が黒姫山にたてこもられてからも、あたりの婦女子に女の技を教えて一生を終らせられたがそのご遺言の中に

「未だ結婚しない女が他国の男に花の蕾を破られても妊娠はさせない」

と誓われてあったという。

## 黒姫山三十三観音

昔から米山は男神、黒姫山は女神であると言われている。「姫が倉」の外には、三十三観音が祀られてあり、ここに祈ると、女性の願いは何でもかなうと言われ、靈験あらたかである。

(一) みはたの音

鎮座の岩屋の中から、機音がきこえるという。

(二) 夏のあけぼの

頂上から夏日日の出をおがむと、必ず紫雲が現われるという。

(三) 駒の足形

黒姫山の山中所所に、馬の足あとがあるという。

(四) 駒形

毎年雪が消える時、その残雪が白馬の形になるという。

(五) 小笹の音

朝 山谷から 笹をふる音がする。

(六) 七つ岩屋

山中その形同じい七つの岩屋がある。

(七) 七つ池

水の増減なく、常に鶴が遊ぶという。

## 黒姫山の竜灯

黒姫神社の社前の大ブナの木を竜灯木という。時々麓に怪火があらわれ、黒姫山をかけ上り、大ブナの木に登って、てっぺんで消える。海上難波しようとする船に、竜が灯を点じて黒姫山にかけ上り、

船の標識になるのだ、と信仰されている。

## またたび清水

鶴川の水源である「またたび清水」は清水谷地内にある。

白川風土記に「黒姫山黒姫神女の御手洗「一升の出つぽ」といい、一升ますのような水つぽが二ヶ所より湧き出ている水を、またたび清水という」とある。

その水は大変清く、長い間貯蔵しても、味が変らないので、船頭たちが喜んで船に積みこんだという。

一説には、弘法大師がこの水を飲まれ、

「また旅をして来た時、ここに来てこの水を飲もう」といわれたので、またたび清水とよぶという。

## 黒姫の腰掛岩と腰掛松

黒姫の中腹に、鶴川の水源池「出つぽ」がある。その上方に大岩があって、「腰掛岩」と言い、みつわの女神がお休みなされた所と、伝えられている。

尚、そこに腰掛松もあったけれども、今は枯れてなくなってしまった。



## 黒姫山の黒石

白倉・清水谷・磯之辺の分水嶺の下を、黒石と呼んでいる。そこを又通称黒石の婆と呼んでいる。その少し上を虫喰平といって小さな穴が無数にあって、金銀財宝が隠されているという。その財宝の番人は、黒石に住む「オウジンシュ」という天狗だという。

## 黒姫山麓一帯の麦作

黒姫山を取りまく二十ヶ村では麦を作らない言伝えになっている。

昔語りに、黒姫山の神様が山を見廻りなされた途中、麦のわりに足をすべらせて目を突いて大変なやまれたとかで、大麥麦をいみきらわれたと、それよりこの近郷では麦を作らないとか。

思うに麦はこの地では不適當なのではないか。

## 初雪占い

黒姫山に初雪が来て二度、三度黒姫山に雪が降るとこんどは里へ初雪がやってくるといわれている。

そして、初雪が笠雪（山の頂上に笠ほど降ったことをいう）であればその冬は小雪だとされ、みの雪（初めて降った雪が山のすその

方まで白くなった場合)であれば、ことしや大雪だぞうと雪占いをしてる。

## 鵜川について

中頸城郡源村(今の吉川町)に、わずかに湧き出ている「またたき清水」という泉がある。一名、弘法清水。この清水は今の川に合流して、えんえんと上条郷を流れ日本海に注いでいるが、不思議に魚類の繁殖が非常に良好なので、世の人呼んでこれを魚川と言っていたそうである。その魚川がだんだん変って鵜川と呼びかえられるようになったという。

## 女谷の地名

八石城主毛利氏が滅びた時、その奥方は野田の花栄寺にのがれて尼となられ、数年にして逝去された。

奥方に付き添っておった女中は、元来性質が淳朴で、忠実であったが、奥方の位牌を懐に入れて、谷間に草庵を作り、一心に開墾した。一念は数反歩の開墾畑となった。

後の人は、女中の開拓した村だということで、その地を女谷と名づけた。

## 毘沙門堂の由来

今から二百年程前、宝暦年間九代將軍家重時代、上野の中村久右エ門が佐水と行き来するうちに、関矢家にあらたかな毘沙門天のあらたかなので時々罰(ばつ)を加えられ、持てあました久右エ門は新井橋から捨ててしまおうと、かつぎ出された。そのころ高原地蔵堂に了全という堂主がいた。夢枕に毘沙門天が立たれ、久右エ門が川へ流すからと救いを求められた。驚いた了全が新井橋へかけつけると今まさに川へ投げ込むところであり、不心得をさとして堂に持ち帰えり安置したという。

現在は観音堂と言わず毘沙門堂といい、昔の地藏尊に代り毘沙門天が正座につかれてある。

また正観音は雨乞観音として信仰があつくご利やくもてき面だった。両仏体とも腐蝕(ふしょく)がひどく、昭和二十七年京都の重要文化財修理技師白石義雄氏に修理さる。仏体お迎えの時、一寸先も見えぬ豪雨となり、お堂に移すと同時に、からりと晴れたという。両仏体とも昭和四十五年十二月市文化財に指定さる。

毘沙門堂の境内の蛙は鳴かないという。

それは毘沙門天を招請した時、蛙が鳴いたので、うるさく思われ、蛙の口のまわりを墨で輪を書いた。それ以後蛙は鳴かなくなったという。

## 正観音の話

享保十五年春、諸国行脚僧が中頸城米山の素封家に安置してあった正観音の立像を盗み出して来て、当地友左工門に泊り翌朝、笈（おい）をあけておがみ友左工門もおまいりすると、実に稀な仏体である。しかし、ここに持って来たわけがわからないので村役人である新左工門を呼んで事情をきいた。

行脚僧から仏体を譲り受け、称名寺の不用な旧寺をもらい和尚伝心と相談して女谷の有志の寄付を得てお堂を建立称名寺の末寺とし、利用し神霊を奥殿に納め黒姫神社境内に黒姫山観音と改称した。神仏混合の時代であったから、不思議はない。

昭和の始め高原田裏山に雪禍二回もあり、このため地藏堂をお守りとして建立高原田総意で其の後佐水より毘沙門天像をお迎えした。正観音は高さ二尺（七十センチメートル）余の桂の一本彫の立像で行基菩薩作、大正十三年四月宮原学校増築するに敷地が狭いため観音寺を高原田地蔵に合併の許可を得て観音寺と改称し、拜殿欄間などは旧称名寺の御堂であるから、そのままにし観音堂に取りつけ称名寺の風格を保存した。

約七百年前の作、台座に記された文「越後国高田朝日山朝日寺本尊正観音、立像二尺、行基菩薩御作、朝日野観音これなり、新瀉往生院隠居証誉的丘之を受け是を建立す。

建立施主、相誉栄人居士、妙意大姉、旭光秀謹童子、釈安常慶居士、松音清寒居士、正誉正覚葉空妙江」と記されている。

## 秋葉山の祠

布施庄兵工さんの盛んであった以前に小池五大夫（五大いどん）が一盛を極めたころがあった。（今中学校屋敷が小池氏の屋敷）小池氏の先祖は野田村田屋から来たものである。

宝暦年間今から二百七十年程前五大夫の全盛時代に高原田の秋葉山は見晴しもよし、位置もよし、ここに秋葉大明神（火伏の神）をまつり、村中の火を守ってもらおうと計画して六尺程（一八〇センチ）の大石を刻ませた。しかし村中にそれを山上まで上げる者がいない。上野部落に武田孫市家の「駒六蔵」という力持ちがいた。暴れ馬でもすぐ押ししずめてしまうというのでその名がある。大石を上げる話を聞いて「よし、おれがかづいてくれるぞ」といって、彼は荷縄をぎりぎり足に巻きつけて足がむぎげぬようにして（藤つるをたたいてまいたという人もいる）ついに頂上までかつき上げた。霊験あらたかな火の神様で村に火事がある時は夜中の十二時に貝が鳴るといわれている。

最近の道正の火事の時も、与惣左工門の火事の時も夜中に貝が鳴って村人に注意をうながしたそうである。

## 静雅園

鶴川小学校に天下の名苑三百坪の和式庭園「静雅園」があって四

季を通じ朝な夕なに庭園の妙趣を遺憾なく發揮してくれている。

庭園全体の構想は近江八景に擬(ぎ)し最後方を築山として大小二つの池が石橋に接して「心」字をかたどっている。築山の全面は苔で覆われ亭々として天にそそり立つ五葉松を中心に、もみ、いちよう、ほか杉栗など、うっそうたる形相を示している。池畔には当地産出の平面持つ大石約二百個を配置して滝に擬しあるいは岩壁を造る。燈籠の数は大小合わせて十基、池畔及び平地に、つっじ七十本かえでなど十本これらはすべて茶園のように刈り込んである。また庭を取りまく石垣の重厚さは訪れる人の心をとらえずにはおかないものである。

この静雅園は当地の旧家布施氏七代の祖(現当主市内西本町静雅堂齒科医布施輝夫氏)が天保から明治初年にわたり築造し九代楨二氏にいたり完成したもので京都から庭師(氏名不詳)を招き一門郎党の協力を得て築造されたものであった。この庭師は岡野町村山氏の貞観園の構築に参画して帰ったと伝えられている。

良斎氏は壮年時代長崎に歴遊し、洋学を修めて帰郷、後進の指導に当り蘭医その門から輩出して「静雅堂」はその塾名である。

昭和三十年十代の貞夫氏の時鶴川村記念事業として小学校々舎移転の候補地に布施氏邸跡が選ばれ庭屋敷そのまま小学校敷地になったのである。

## 孝則筆塚

旧鶴川診療所の傍らに彫りの見事な石塔がある。これが当地私塾

の創始者布施孝則氏(現市内布施眼科医徳衛氏の三代前)の徳を慕う筆子たちの建てた常夜燈の筆塚である。(明治十七年建立)

氏は若くして南条村の藍沢師から漢学を習い幕末の十年間は天領庄屋として大いに活躍された。明治に入ってから村内の子弟を自宅に集め読書・算術・習字の初歩を教授してその声望は上条郷になりびびいたのである。明治五年の学制発布に伴い七年に鶴川校開設の運びとなり、引続き句読師(教師)として三年間勤められた。四十二年九十四才で永眠されるまで広く世間に交際を持たれ米寿の祝いなどには全国から著名な学友が馳せ参じるといふ有様であった。火袋の下、石柱の竜は氏が平素教えておられた「雲を呼んで天に昇る」という氣風と当家に伝わる「蛇切丸」を現わしているという。それを力一杯支えている四人の男、顔はそれぞれ違い、姿態も異なるが師弟一丸となった向学の氣風をおのずと感得させてくれる素晴らしい芸術品である。

石工梅沢文宗氏は野田村熊谷の産(現当主敬二氏の父)十八才でこの傑作を生み出した。道行く人誰もが足をとめて絶讃惜しまぬ石塔である。

## 黒姫神社

黒姫山頂の黒姫神社を天武天皇の白鳳六年神託によって、十町子丑の方へ社を引き(折居黒姫神社)更に後小松天皇の応永二年約三町東方へ遷座されたとのことである。今の元屋敷がそれである。

昭和三年小学校移転に伴い元学校屋敷に神社を移されたものであ

る。

昭和三十三年九月十五日女谷黒姫神社の千年祭を行う。

十四日の前夜祭には百五十発の花火打上げ当日は綾子舞を奉納して夜は盆踊り大会あり女谷始って以来の大祭典なりという。

その年折居上向の黒姫神社の二千年祭があったと聞いている。

## 大杉の話

昔ある人が伊勢神宮に参拝した時、お杉、お玉という美しい娘に出会った。女郎ではないかと思っていたが話を聞いてみると旅芸人の踊り子で、女谷のものであるということであった。そこでその人が女谷に来てみると、黒姫神社と今の高原田の郵便局の前にそれぞれ一本ずつ大杉があるだけで人家は一軒も見当らなかった。

美しい二人の踊り子、お杉、お玉はこの二本の杉の化身だったのではないかといわれている。今では神社の大杉は市の天然記念物に指定され、四方八方に枝を張ってうっそうと生え繁った古木は参詣の人々を驚かせている。郵便局前の大杉は周囲二丈五尺（七・五メートル）もあったといわれているが、いつの間にか切られて跡かたもない。この杉をお玉杉と言っていたから神社のはお杉というわけである。



## 板山池と布施徳兵衛

鶴川地区女谷の奥三里（十二キロ）程の山中に一つの池がある。もうそこは米山続きの山々が近くに迫って周囲の木々は黒い影を湖面に落している。里人はその池を板山池と呼んでいる。昔女谷に布施徳兵衛という庄屋があった。ある晩珍らしく夢を見た。板山池の主だという竜が現われて「実はこの度信州の野尻の池の主と戦わねばならなくなった。ついては是非あなたの刀が借りたい、承知してくれるなら、あなたの家の屋根の上にあげておいてくれ」というと思ったら夢がさめた。徳兵衛は気味が悪いやら恐しいやらどうしてよいかわからない。しかし、夢の通りしておくことが最もよい方法であると思ひ、家伝の宝刀を屋根の上においた。幾日も経たぬうちにその刀は見えなくなった。それからしばらくして野尻の池の水が真赤に染った。それからまもなく徳兵衛さんの家の屋根に刀がもどっていた。刀を抜いて見ると少し刃が欠けていたそうである。それは野尻の池の主との戦いの際欠けたものだろうという。布施家では「蛇切り丸」と言って家宝として保存している。

戦いの原因は板山の主が信州の主のお嫁をもらいに行った。ところが野尻の主は、お前のような小さな池へやることはできないと言った。再三の申し入れも受けられず、ついに怒って戦いをしかけたということだ。またこの池に石を投げると必ず雨が降ると言われている。

## 椀貸し板山の池

女谷より奥三里（十二キロ）の山中に板山の池といういくら風が吹くとも木の葉一つ落ちない雨を祈れば雨を降らす。お膳を貸して下さいと紙に書いて池に入れば幾人前でもちゃんと揃えて池の端に出して貸してくれるし、お椀を貸して下さいといえばちゃんと揃えて貸してくれるという池があった。

この池の主と野尻の池の主と戦うため女谷布施徳兵衛氏の蛇切丸が活躍したのである。

## 長者が塚

昔、女谷の長者が原に（現在の鶴川郵便局前の丘）長者がいた。長者にはたった一人の娘があった。年ごろになると良縁があつて佐渡から婿（むこ）をもらうことになった。娘はもとよりやさしい娘であつた。婿も氣立のやさしい男であつた。夫婦仲は他の見る目もوراやましい程むつまじかつた。長者夫婦もよい婿を迎えたと心から喜んだ。幸福な日が長者の家に続いた。しかしその幸福の神もついに長者の家を離れていった。どうしたことか大事な婿が急に佐渡へ帰ることになったのである。四十九里の浪路を越えて来てくれた婿が再び戻れようもない佐渡へ帰るとは、世にもはかない契であつた。娘は泣いてばかりいた。泣いて泣いて泣き尽した末に娘はどう

とう病氣になつてしまつた。恋しい人に生別れ、病の床に悶々（もんもん）の情やるせなさに娘はついに帰らぬ旅に上つてしまつた。「私が死んだら佐渡の見える山の上に埋めてくれよ」と遺言した。その遺言によつて出来たのが長者塚である。女谷からは佐渡が見える日もある。見えない日もある。しかし長者塚のある山の上からはいつでも佐渡が見えると言われている。現在は跡に何もとどめない雑木と畑におおわれている一つの丘に過ぎない。言い伝えによれば今から百数十年前番屋部落の某兄弟が金銀のはたごを手に入れ夜を徹してその取りくずしをし夜の白々と明けるのを待つて京に逃げたという。

この長者塚は元日の朝に鶴の声がきこえるという。それは長者の塚の副葬品の金の鶴がなくのだからという。

## 天狗松

鶴川スキー場のある山を天狗松という。頂上に素晴らしい枝ぶりの大人四人でやっと抱きつかれるような大木で山の風致を添えていたが松喰虫にやられて枯れてしまつた。

近くに長者清水があり長者の住居があつたらしい。

長者がこの松の木の根元に宝物を埋め、それを掘り出させぬため松の木に天狗が住んでいるからそばへ行つてはならないと言ひ伝えられたらしい。ある年谷根のお坊さん（新沢瑞寛師、生仏様と仰がれた人）がそのあたりを通られ「この宝はまだ掘る時期ではないぞ、時期が来ればほんとうの正直の人に掘れ」とい命令がある」といわ

れたとのことである。

布施庄兵工さんが戸長の時、村中で塚から二町余二日半もかかって掘ったけれども何もなかった。「五りんの石」だけ二個出たそうである。

今宮原の元新八の庭園に保存されているということである。

## 梅本院の縁起

当山は人皇四十八代称徳天皇神護年中、丹波国弓削道鏡法王当国を行脚して来た際、空中に紫雲があり、道鏡が山に登ると役小角へえんのおずぬー修験行者の祖ーが現われ法皇につけていうには、大峯洞呂川に毒蛇が住み、苦行する僧侶は山に入ることが出来ず末流私峯を立てて国々の峯に入るとしても、まだその峯を知るものがない。この山は不動尊の霊場であり、罪障懺悔(ざいしょうざんげ)の宝峯でもある。「本谷の里」と名づけられていた。悲しいことに中古よりふるだぬきが住んで里民を害した。汝(なんじ)は法力でこれを降伏させ、仏法を広めて里人を救いなさい。汝に五知の宝冠を与える。これをいただいで修行すれば魔障(ましょう)を降伏することが出来る。すなわち頭巾を与え、道鏡はお受けした。それで「頭巾山」と名づける。

峯中見回すと一滝がある。感満の水音が響く。道鏡が喜んで、ほら貝を鳴らして客僧を呼び集め、陀羅尼のお経をよんだところ不動尊が滝の上に現われた。行者は滝の岩に法螺を掛けてお経をよんだので「法螺掛の滝」と名づける。

西北に山がある。明星山と名づける。泰澄禪師解脱の峯と名づける。麓に岩堀がある。美女堀という。つやっぱい声がしているの。道鏡がたずねさせたところ、あやしい女が集って舞い歌ってさわいでいる。法皇はふるだぬきであることを知って、不動の空縛(からしぼり)を修すると、あやしい女は、みんな倒れ死んだ。今は本谷村を改めて女谷というのはこのことだからである。その法験があったので山を法験山と名づけた。

死んだたぬきが化けて出たという処に一字(いちう)を建てて日々、妙法一卷を誦して、我等衆生を救いくださいと願った。道鏡はこれを承知して一字を建てた。即ち妙法山一卷村と名づけた。僧侶は集合して坊舎を創しこれを「宿の平」と名づけた。八幡あらわれて、妙法を感じ、僧侶は喜んで宮殿を営み、名づけて八幡殿といった。地頭上聞があつて寺領を付し、十二坊を創建した。

延長二年白川の安珍法師が峯に来たが、はやり病があつて里民がこれにかかつて苦しんだ、安珍が摩訶利の法を修したところ、牛頭天王が出現し、はやり病はすぐに治った。そこを天王釣峯と名づけ、また、天満宮が来現し近ごろ募女の災害があることを告げた。安珍歓喜し、尊像を移刻し、十一面の法を修しようと思つたら清泉が湧き出た。それを汲みとつて醍醐(おか)とした。それで「水口(みなくち)」と名づけ、修法の中に梅木が生え梅本院と名づけた。

正治二年芸州の住人宮島四郎清光、下野国住人布施太郎兵衛之尉行長が来て里に住む。建保六年相州の住人中村太郎時経が入り、それぞれ田畑を掘り起して諸氏を集め貢した。

永祿四年長尾謙信郷御帰依があり、長福寺と名づけ僧侶を集め、お寺が盛んになった。

その後、兵火のため焼失して今は田圃となり草庵のみ残ったが本尊の靈験あらたかなことは月の水にうつるようになり明らかであり、信心婦依のなかまは、この世の願いが望み通りかなえられ、未来の仏のごりやくをいただくことはまちがいない。

### 中条のたたり（塚田の神）

上野地内大野という所に中の修七郎右エ門の尊を祀った祠がある。村人は塚田の神と呼んでいる。女谷村が十三軒だったころ、七郎右エ門がみんなに憎まれて追いかけられ井戸の中へ飛び込んでしまった。みんなはこれ幸いと彼を生埋めにしてしまった。その後、水口（みなくち）の先祖がそこに住みつきそこを耕作するとひどいたたりがあるとおそれられていた。水口ではそこに塚を立て神として祀り毎年神主さんがはらいされるという。

（来年はそこが耕地整理にかかるので格好の場所を選んで移さねばならぬと心配している）

### 鹿の跡石

尾神岳のふもとに鹿の跡石という石がある。ちょうど塗りたての畔（あぜ）に山羊があがったように四つの動物の足あとがついている。村の人は鹿の足跡だといっている。

小池五太夫どんが全盛時代是非その石を自分の庭園に持って来て

飾りたいと思って村中を動員して石を掘り出しに行かれた。

朝快晴だったのにその石に手をかけると一天にわかにかき曇って大雷雨になり大水が出て、とうとう事を果さず逃げ帰った。

二・三年後、またあきらめ切れず再びその石を掘りに出かけたけれど同じように大雷雨となり五太夫どんは「これこそ靈石だ」といってそれ以来掘り出しをあきらめたという石である。

不思議なことに昭和二十年の大水後そこへ行ってみたら石が横になつていたが三十年の大水後はまたもとの形にもどって今でも鹿の足跡がはっきりついているという。

### 宮嶋の紋所の由来

宮嶋家の紋所は三宝に神酒（みき）どっくりが二本のっている珍しい紋所である。

上杉謙信が家来を連れて戦勝祈願のため、佐水の毘沙門堂を詣られ、水口（みなくち）の梅本院に寄られてお参りをされたあと、水口の大酒豪と謙信の家来の大酒豪と大盃で酒のみの競争をしたら水口の方が勝ったので謙信がその紋を授けられたという名誉の紋所である。

### 二十日堤

安永二年宮原で用水不便のため上野荒井堰（あらいせき）を作り

段塔婆より堤を築いて宮原に引入れることにし、女谷五部落が協力してかごやもっこで土を運び二ケ年でようやく完成した。この堤を「二十日堤」という。春この土堤の上の土が見え初めて二十日過ぎると沖（平地のたんぼ）の雪は全部消えるという。

## 綾子舞について

刈羽郡女谷、折居谷の辺には「あこや」と名づける歌およびこれに合せる舞の手が伝来し優にやさしい句調と身振りである。これは永正六年国主上杉房能、その宰臣長尾為景に松之山天水越で自尽の後、奥方綾子を始め追隨（ついで）の老幼婦女は身を容れるところが多かった。同郡加納山の城主毛利家ではこれをあわれみ知行所の山間にこっそり住まわせて扶助をした。そのころより起った歌舞で、女谷、折居谷などの名称も之に拠るといふ。この綾子の伝えた形身の舞が綾子舞だといわれている。又一説に綾子は房能が京から連れてきた白拍子だったともいわれている。折居谷のは明治二十年代に絶えたが女谷では下野、高原田の両部落に今尚伝わっている。狂言に関しては徳川中期のころ京都の寺侍茂田茂太夫という狂言師が夫婦で来て住みつき高橋の姓を名のったとき茂太夫は高原田に婦は下野に教えたものだと言われている。従って高原田のは少しごつごつしており、下野のは振りがやわらかであるといわれている。

綾子舞は踊と狂言と囃子舞との三種類がある。

注、越後風俗志、国史大辞典にはアコヤ（阿古屋舞）とあるが綾子舞が至当であると思う。

## 兜巾山（ときん）の由来

相崎米山大橋の付近の断崖は昔は米山三里といつて非常に険しく人が通らなかつた。それで人々はこの兜巾山を抜けて街道に出ていた。ある時僧道鏡がここを通つた際、あたりに渦巻く妖雲（よううん）にただならぬ気配を感じ、身につけていた頭巾を埋めて祈（とう）した。とたんに妖雲は消え去つた。以来この山は兜巾山（頭巾山）と呼ばれるようになった。またこの山の近くには宿場だったと見られる「宿」という所があった。その他には比叡山に匹敵する七堂伽藍があったという。これも道鏡がこの辺に寺を建立したのがその始まりであろうと言われる。

## 明生山麓の滝

鵜川の本流、荒又川の水源地明生山麓に螺掛、不動の二滝がある。

○螺掛（かいかけ）の滝

称徳天皇の神護年中丹波国弓削道鏡が北国に廻つてきた際、この滝で頭巾を掲げ法螺貝を吹き行をし、明生山の古狸を退治したことから螺掛（かいかけ）の滝の名前がついた。

○不動滝

螺掛の滝の真下に不動滝がある。高さ四メートル、滝水の落下する奥に約一坪程奥行二メートル位の岩屋があり不動尊があるといわ

れているが落水が飛散して見ることも入ることも出来ない。

明治十八年ころ刈羽郡半田村の神職玉田勝伊師は当時下野山字螢  
ツネにある大山・すみのみこと（山の神）を兜巾山上に奉遷し、里  
人の幸を祈らうと七日七夜の間この滝で荒行をし兜巾山を開き山上  
に螺掛神社を創立した。これに讃助した人は故高橋時平氏、大野利  
三右エ門氏、宮嶋弥作氏（三九郎）の三氏であった。

滝の上流に宿平があり、昔宿があったという。熊野堂という所が  
ある。ここに堂があり金仏が安置されていたという。堂は荒れ金  
仏はどこへ行ったかわからないが、そのうち二体がこの滝の付近で  
里人に発見された。一体は上野の武田孫市家に一体は番屋の猪俣茂  
藤由家に安置されてあるという。故宮嶋準治氏（三九郎）談。

## 古代の仏体見当る

宿平に農耕に行くには荒俣川を上る路があるがこの川には橋がな  
く、川を数回渡り歩いて行くわけである。明治中ごろ上野の孫市の  
妻が山に行くため川を渡ったところ、わらじと足の間に小石がはい  
って歩かれないので、背負っていた荷物をおろしてよく見ると石で  
はなく鑄仏であった。大変喜んで家中に見せ家宝とした。折居の高  
橋国造がこれを聞いて訪ねてよく見たところ、付き合せて一方は釈  
尊一方は観音仏である。お願いして釈尊の方を貰い受け家宝とした。  
その後高原田の半助という妻も川を渡る際わらじの間に鑄仏がはさ  
まった。どちらも工鑄物型で精巧で珍らしい品である。尚この型に  
は金箔を混ぜた見事な仏体もある。

尚折居より上石黒に越す杉の平という処に耕作に行った上向の久  
七の妻も畝に石のあたる音がして、よく見ると金仏で千手観音であ  
った。家宝として仏壇に祀ったという。

## 兜巾山のむじな

上杉謙信の孫が春日山にいたころ、むじなが侍に化けて家来を引  
き連れ、ある家にやって来た。明日は「天下の婆さん」（天下様と  
いわれる家康の祖母のこと）がやって来るので風呂をわかしておく  
ようにと言われ、家の者に絶対見ないように、またこの近くに犬を  
寄せつけないようにと言いつけた。ところが好奇心にかられて、こ  
っそり盗み見した家の者は大きなむじながしっぽを振って気持よさ  
そうに風呂に入っているのにびっくりして犬にけしかけて追い出し  
てしまった。以来この家は落ちぶれ今までに三度も放火されたとい  
う話である。

## 道正橋の由来

永正のころ、下野橋の上を見馴れぬ夫婦の旅人が行ったり来たり、  
ひそひそと話し合い心配そうな様子であった。通りかかった新左エ  
門がどなたかと聞くと「われら旅芸人であるがこの冬枯れ時路銀も  
なく困っている」と答えたので、新左エ門の家に連れてきて一夜の  
宿を貸し、村人に芸を教えてくれるように頼んだ。

綾子舞狂言を教えた茂太夫夫婦である。それ以来この橋を「どうじょう橋」といい、新左エ門の家号を道正という。

## シンナナ清水としゃくなげ場

旅の途上にある弘法大師が水がほしくなって、ひしゃくを投げお経を唱えたら大師の坐っている地面の下から水が湧き出てきた。こゝを「シンナナ清水」といい今でも水が湧き出ているという。

また、ひしゃくを投げたところを「しゃく投げ場」という。

この清水は兜巾山の中腹にあり（女谷の共有地）その清水は小牧川に注いでいる水質もよく、いわなややまめがすんでいる。駒の間勘兵エ氏の雑木山だそうである。

## 太子講

弘法大師は、女谷に来て泊られた家は、貧しい家であった。

老婆は、太子に差しあげる物がなかったので、隣りの家に行って稲を盗んで、それでだんご汁を作って太子にさしあげた。

太子はあわれに思い、その夜雪を降らして、老婆の足あとを消されたという。

今でも十二月二十四日に、太子講をしているが、その夜は必ず雪が降るといわれている。

## さいの神さん（女谷）

女谷にさいの神さんという家があった。

子供が十六人あったが、それぞれ良縁を得て生活していた。

一月十六日は穀入りで、十六人の子女は帰宅して、賑やかに一夜を過すのであった。いざ十七日に帰る時は、米・麦・大豆・等々それぞれもたせて帰らすために、さいの神さんはすっからかんになるのであった。

某年正月穀入の日になったが、貧乏になったさいの神さんは困って、自宅に放火した。十六人の子女は之を望み見て、材木だ、食糧だ、被服だと言って、持ち集まったので、さいの神さんは、たちまち裕福になった。

この事があってから、正月十六日に、家を模して藁を積みあげて、之に火をつけ、幸福をいのる仕きたりが出来、さいの神といったという。さいの神は、幸の神・賽の神・災の神・歳神とかく。

## 五本木の地蔵

駒の間と阿相島の境の右手の山の上に地蔵様がある。

これは安産の神といわれ、この地蔵に燈明をあげて安産をお祈りすれば燈明が消えると同時に安産するといわれている。

昔は道刈りをしてお参りする人も多かったが今は草におおわれ地

蔵尊の姿も見えない程である。

## 鹿落し穴とボウ鳴り淵

折居から女谷の間に安常山という小高い山がある。その麓には忠魂碑が建てられている。そのわきの道を登っていくと頂上に胞姫様を祀った祠がある。それは柿崎の胞姫神社から分祠されたものである。そのお堂を越えてしばらくいくと直径四尺（一・二メートル）深さ六尺（一・八メートル）位の堅穴が二つあって鹿落し穴といわれている。昔鹿を落した穴だそうである。

更に行くと真下に鶉川の流れをのぞめる断崖がある。これを「ボウ鳴り淵」と呼んでいる。昔、使い古した牛をその崖から突き落して殺した所だそうで、ボウ、ボウと牛の鳴く声が悲しそうに今でも夜中になると聞えるそうである。

## 秋葉山のたたり

拝庭の秋葉山は灰下（あくした）の裏の天上山にあって拝庭を一望に見渡せる眺めのよい所に祀られてあった。しかし天上山までは部落民がお参りに行くには容易でないというので便宜上今の公民館前の道祖神と合祀した。山の上から人間のごみはこりではげしい場所に移されたことを怒ってその後拝庭には不具者が多いといわれている。

## いわやの話

### 一、不動岩や

拝庭、阿相島との間の山奥に不動尊を祀った大きな岩やがある。昔酒頭童子（しゅてんどうじ）が山塞（とりで）を設けたと伝えられている。

前に灌漑用のせきの清い流れがあり、道下には平らな広場があり、すぐ上方には滝が落ちて夏は涼しく格好のキャンプ場になっている。

### 二、提灯岩や

不動岩やから、せきに沿ってせきもとに上るとちょうちん岩やがある。そこには大山祇命（山の神）が祀られてある。丁度山の真中から大きな（七尺位）提灯をぶらさげたような見事な岩やである。

### 三、こうもり岩や

黒姫山へ上る道中に「かんざえんおとし」というけわしい所がある。そこを通るとその道下に、いわやがあるこれを「こうもりいわや」と呼んでいる。自来也がそこをねぐらにして悪事を働いていたといわれている。

自来也は常に数百人の手下を持ち、毒の妖術を使って盗賊を業とする。強きをくじき弱きをたすけて、特に貧乏人に財をわけてや

ったという。

## 舟繫石・蛇岩

○舟繫石

阿相島より嶺村越の間道の峠には大石があって穴があり太古に舟をつないだので、舟繫石（ふなつきいし）という。

○蛇岩

拝庭より石黒に通じる処に杉の平という処がある。黒い岩で蛇岩という。この岩二町余りであって、蛇のわだかまるような形であるので名づけられたものか、今も草木茂らず岩には貝殻が混っている。太古には海水満々とただよっていたという。

## 寺屋敷の塚

折居北向部落、小林繁二氏の裏側は小高い雑木林になっている。少し登った所に屋敷跡と思われる平らな場所がある。間口十間奥行四間約四十坪（百三十三平方メートル）程の地所でその右端に直径二間（三・五メートル）のまん頭型に土が盛られてある。部落の人はここを寺屋敷の塚と呼んで、この塚の上にと目がつぶれるといつて子達に言い聞かせていた。

塚は中央が掘られてあるがだれが掘ったか、何があったかはだれも知らない。だが下まで掘られてはいない。まだ残されている

のではないかと思われるのだが。

## 矢剣神社の由来

北向部落、高橋県一（屋号樵や）氏の裏山に矢剣さんと言われる小さな石の祠があり毎年五月八日北向十二様のお祭りの日に樵やさん個人で矢剣さんのお祭りをしていられる。

高橋氏の先祖は毛利丹後守の家来であり、武士の家柄であったが長尾為景との戦いに敗れ北向に身をかくした。そして日本刀を埋め神社に祀り農業を始めた。その祠を「やつぎさん」と呼び部落の十様に分祀して部落民も共にお祭りをしていられる。

## 北向十二様のいわれ

北向小林家の先祖は枇杷島城主宇佐美駿河守の流れであるといわれている。北向に住みつかれる際、枇杷島の十二社神社を分祀してもらい、祠を建てて祀ったのがいつか北向部落の産土神（うぶすながみ）として部落民が信仰するようになった。いつのころか樵や裏の矢剣神社も合祀して毎年五月八日に祭を行っている。

## 上びろうの蛇切沢

昔、折居と岡野町の村人が黒姫神社の土地争いをしていた。神社

は頂上を少し岡野町の方へ上って建てられてある。折居の者は「自分達が建てたお宮さんだから折居のものだ」といい、岡野町の人々は「岡野町地内だからおらのものだ」といって毎夜毎夜争いが絶えなかった。黒姫山に続く上びろう（蛇尾平）の尾根が丁度大蛇がくねっているように見えた。岡野町の人々はこの大蛇の胴と尾のあたり二ヶ所を切りつけた。そのため折居は負けて神社は岡野町の管轄になっている。今北向地内上びろうへ行ってみると大蛇が切りつけられたように婉々と続いている山が二ヶ所途切れているのが不思議に思われる。蛇切沢と呼んでいる。

## けさがけ地蔵

折居上向地内地蔵峠の頂上に地蔵堂が建てられてある。板畑の女が夕暮れころ、この峠を越して家に帰ろうと急いでいる時どこからともなく山賊があらわれて乱暴しようとした。女は助けを求めてもがいているうちに山賊は逃げ出す女の姿を見て怒ってその女に切りつけて逃げ去った。板畑の女がこわごわ顔をあげてよく見ると地蔵尊のお姿が横たわり、けさがけに刀の傷あとがついていた。女は地蔵尊のお陰で救われたと思ひ、明け暮れその地蔵尊にお参りしていたら、いつか自分の持病の婦人病まで全快しているのに気がついた。以来その地蔵をけさがけ地蔵といい、折居、板畑の信者が進んで寄進し、祠を建ててまつた。

この地蔵は腰から下の病気には靈驗あらたかと言われ毎年九月四日の例祭には上向部落から二キロもある急な坂道をもいとわず大勢

の参詣人がある。

## 入道山のこんぴらさん

上向部落の小高い裏山を入道山という。そこに金比羅様（二・七メートル四方）がある。四国の金比羅様の分祀されたものといわれている。建立した人は佐藤水久保という人。昔飛脚をしていた人である。ある年道中で預った金子を全部泥棒にとられてしまった。思案に余って四国の金比羅さんに願をかけた。

それから三年後また道中で馬に乗った侍に会った。「三年前に金を取ったのはこのわたしがどうか許してもらいたい、三年後には必ずお金を返すから」とあやまった。しかし水久保はその侍を切ってしまった。その後、水久保には不幸が続き年毎に貧乏になるし、金の入るあてもなし、困りあぐんでまた四国の金比羅さんにお願ひして分神して信仰したけれど遂に家もつぶれ今は屋敷も畑になって金比羅さんだけが残されている。今でも水久保家内（やうち）の人はお祭りをしている。

## はつか石の話

上向の部落をはずれ農道に差しかかると、とっつけの左手に久七の田がある。その田の真中に高さ四尺（一・二メートル）直径六尺（一・八メートル）程の石がある。

その石を村人は二十日石といっている。鶴川地内でも特に雪深い黒姫山の上り口にある所だけに春の雪消えを村人は待ちわびて暮している。その石の頭が見え始めてから二十日経つと野良仕事に出かけられるというので二十日石と名づけてその石の頭の見えるのを楽しみにしている。

## 和合神

上向、庄五郎宅の土蔵のそばに和合神と刻まれた石が小さな祠にまつられてある。これは後に刻まれたのであるが原石はそのまゝそのわきに並べ祀られている。昔、庄五郎では家中に争いが絶えなかつた。そこでそれを苦にした婆さんが石を三つ重ねて家内和合を願っていたら、いつの間にか争いが絶え人もうらやむ仲のよい家庭になった。

それからそれに和合神と名づけ一家の信仰はあつた。いつしか部落の人もその和合神を信仰するようになったといわれている。

## 上向のいぼ石

上向部落一体は石の部落で大小様々の石が屋敷から道路、畑や田の中にごろごろしている。これを「いぼ石」といって各地から庭作りに運び出されている。春、田植えころになるといぼ石一面にだいたい色にかれんな花が咲いていて誠に見事であるが、これは一種の

苔類で他に移植しても絶対に咲かない。いぼ石特有のこけである。黒姫山の湿地（鶴が住んでいたという）の池尻が抜けて上向地内に流れ落ちた石が「いぼ石」であると伝えられている。今でも残った湿地の底には雨天の折は少々水が貯まり、そのあたりの山の池尻と呼んでいる。

## おまいりさんのいわれ

市野新田に昔大なだれがあつて、半左エ門、角左エ門、五右エ門、星野、下村の五軒の家が今の江尻辺まで押し流され殆んどが土砂の下に死んだ大悲慘事があつた。

その時角左エ門の年寄りがお仏壇で一心におまいりをしておられたので仏壇をかぶつてお陰で一命が助かった。

それから角左エ門のことを「おまいりさん」と呼ぶようになったということである。

## 谷川津兵エと谷川新田

谷川新田は黒姫山の中腹にあつて、近くに黒姫連峰を望み遠く柏崎市街を眺められる風光絶佳の地である。土地が肥え美田がここに拓かれ、丘の上に一祠があり谷川津兵エ翁が祀られている。

この翁が谷川新田の開拓者でこの地の大恩人である。初め文政年間（今から約百三十年位前）翁の先人が開拓を志して、

出つぽを水源として引水を企てた。この地は黒姫の山腹で山つぽまでの距離が約二・五キロ、それに加えて岩盤が層をなして工事が困難なために意を果さなかった。しかし翁が一度工事を起した時、困難にあつて屈せず、自分の財産を投げうって惜まず、のみを振って岩盤を砕き、すべての人力を尽してようやく水路を通すことに成功した。その後この地に小作人数戸を移住させてここに谷川新田村を創設したのである。

翁の開拓した引水路は大字清水谷の上部をえんえんと流れ谷川新田灌溉の流れは常用水として清水谷全区をうるおしているだけに止まらず、上釜地内、丸山平等にまで利便を及ぼしてその恵みの大きいことは推し測ることが出来ない。

区民一同は翁の事業を称えるため一祠を建立し新しく頌徳の碑を建て長く遺徳を伝えることになった。(大正十年七月建立)

